北国の女の物語 上

水上 勉

講談社

北国の女の物語（上）
昭和四十七年八月十六日　第一刷発行
昭和四十七年十月十二日　第五刷発行
著　者　水上　勉
発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽二―一二―二一
郵便番号　一一二
電話　東京（〇三）九四五―一一一一（大代表）
振　替　東京三九三〇
印刷所　豊国印刷株式会社
製本所　株式会社国宝社
定価六二〇円

落丁本・乱丁本はお取り替えいたします。
©水上勉　昭和四十七年

Printed in Japan

0093-126061-2253 (0)　（文1）

目次

第一章　尻屋崎に乳呑子の浮きあがること　7
第二章　観音堂守のおしか、子を養育すること　31
第三章　沖子田名部に移り恐山に参詣すること　57
第四章　沖子大間の伊助と華燭の典をあぐること　84
第五章　夫の不慮の死に愛別離苦の悲しみを思うこと　110
第六章　岩屋の砂鉄飯場で飯たき女になること　136

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第七章　沖子再び田名部にきて本家づとめをなすこと　163
第八章　三男喜太郎が飄然帰省して離れに暮すこと　191
第九章　戦色濃い大湊へ勤めるべく沖子家を出ること　221
第十章　主計中佐夫妻が沖子の再婚話に苦労すること　250
第十一章　喜太郎スパイ容疑で憲兵に捕まり自殺すること　279
第十二章　沖子浅虫温泉の南部屋に女中として入ること　306

装幀／丹阿弥丹波子
挿絵／小松久子

北国の女の物語（上）

昭和四十年一月～昭和四十一年十二月号
「小説現代」連載「悲母観音」改稿改題

第一章

尻屋崎に乳呑子の浮きあがること

1

本州最北端といわれる下北半島の尻屋崎は、芝草に被われた石灰質の岩盤がなだれ落ちるように太平洋に没している。先端へいくと、けわしい断崖になり、突端には、海馬、その南にやはなれてイサゴという島がある。さらに岬の裾は無数といってもいいほどの大小さまざまの岩が頭をもたげて波も荒い。岬は北へ向ってつき出ているので、太平洋側から打ちよせる波と、津軽海峡側からよせる波が、両側から崖裾を洗うので、一日じゅう波がさわぎ、本州最北端にふさわしい荒涼とした光景だ。かくれた岩石がいくつも崖近くに潜在しているので、太平洋側から曲ろうとする航海船が難破する。その故か、ずいぶん、早くに岬に燈台が設置された。尻屋崎燈台と名づけられている。いま、手許にある下北半島史を繙いてみると、

「尻屋崎は本州最北端なり。東径百四十一度二十七分二十五秒、北緯四十一度二十六分十秒の位置なり。米国、英国、仏蘭西との条約に基きて、燈台設置第二次計画として、明治六年六月十一日建設工事が起こされ、同九年十月二十日竣工せり。即日点火せり。塔身高さ二十八米。基礎直径八米、上部同四米、光力二十五万燭光、光達距離三十六粁なり」とある。

青森県権大属小川渉が、第六大区長の箱石藤暉にあてて、

「此度尻屋崎燈台建築に相成候に付、山本権中属出張に相成候処、右は不容易大業にて多分之御入費をも相懸候儀に候得共、尻屋崎は非常の難場にて、古来航海者の難渋不一方、年々数艘

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

之破船も有之儀に付き、朝廷に於て厚き御趣意を以て多分の御入費をも不被為厭、御建築相成……云々」といっている。航海上唯一の難所といわれたわけである。

しかし、燈台が出来ても、難破船が絶えたわけではなかった。今日でもそれはある。この物語りを書くにあたって、作者は過日尻屋崎の突端に立ってみた。白亜の尻屋燈台とその附属建築物は、明治六年の建築とは思えぬほど立派で、いまは放牧場になった、荒涼たる原野の最先端に建っていた。人里はなれた原野で、白い美しい建物に接するのは嬉しかったが、燈台から、わずかに五十米もはなれていない、太平洋岸の断崖下をのぞいた時唖然とした。赤錆びた船底が岩角につき破られて真二つになった巨船が、放置されてあったからである。波に洗われた鉄板は、一見して、船首であった。凄惨な遭難時の模様を彷彿させたが、きけば、全乗組員が死んだ。つまりこのような難破船の残骸はいたるところにあり、近くの村民たちは、船が遭難したと聞いても、驚きはしない。

尻屋、岩屋、野牛、尻労、猿ヶ森といった孤村があるが岬でえぐれた穴ぐらのような傾斜地に家は集まり、これらの村の家々には、「長柄のカマ」と名づけるひっかけ道具が家宝になっている。祖先たちが難破船を襲う時に使用した道具だ。

難破船を襲う——聞いただけでぞっとする話だが、まったく、この岬の孤村は、文化果つる村で、石灰質の岩盤だから、水田はない。せまい土地に陸稲、芋、麦をつくるほか、荒波をくぐって、イカ、鯛、イワシ、などをとる漁師生活である。海がシケ、田畑が霜害にあった年などは、海山の獲物からしめ出される。中には、馬主からタネ馬をあずかり、幼馬を育てて、い

わゆる馬飼いをいとなむ者もいたが、しかし、「長柄のカマ」を研いで、難破船の食糧を略奪せねばならないような日もあったのであろう。このカマをみていると、錆びた鋼の肌に荒涼たる自然と戦ってきた岬の民の歴史がしのばれる。

尻屋という部落は、岬の突端だから、本州最北端の村である。人口二百二十。戸数六十一戸、といわれるが、長い年月には離脱していった人も多い。

淋しい村で、尻屋崎から、約一里ほど南下してくると、小高い山につきあたる。長石蔵山という。全山石灰岩の屹立した樹木一本とて生えていない山だった。この山ふところに、抱かれるように、部落はあった。土地がないため、家は、てんでに石垣を積み、その上にわずかな平坦地をつくり、小さな家をたてているが、風がひどいから、杉皮の上に石を置きどの家も粗末である。漬物小舎か、藻類、雑穀類の穫入れ小舎をもつ家は二、三しかみられないが、大半は庭もなく、ただ、石垣の上にたてたというだけで、海からせりあがる斜面に、貝殻のようにひっついている。

大正三年の秋末の夜の海が荒れた。鉄砲家と床屋の道端の家へ来た燈台の係官は、午後四時ごろから風雨注意報を報じたが、夜に入って、こんなに荒れるとは報じていなかった。屋根がひっぺがされはしないかと思われるほどの暴風雨となった。斜めにしぶく雨は、風にまじってうなりながら段々の家の戸をたたき、海豹の大群がおしよせたような高波がさかまいていた。燈台の灯は二十五万燭光の光で霧笛をかなで、四方を照らしたが時折、村へ光が向けられると、風にたたかれる床屋の家が明るみに出て、小豆粒ほどの霰がまじっているのがわかった。

凍えるような寒さだった。
部落の人びとは大戸をしめ、風のやむのを待った。明日になれば、またしずかになるだろう。馬小舎に入れた牛馬の寝しずまったのをたしかめ、大人も子供も寝所に入った。十時を少しまわった時である、異様な轟音をきいた。それは波が岩をくだく音に似ていた。金属音がしたようにもきこえた。巨大な箱か建物かが、こわれる音である。
〈おや！〉
六十一戸の村で、その音に気づいた者ははね起きた。
〈難破船だろうか〉
そう思った人もいたそうだ。しかし、外は霰をまじえた暴風雨だから、出てゆくわけにもゆかない。気になりながら、人びとは、眠りに入っていた。
南から北へ向けて航海中の八十トンくらいの貨物船が通称「二ツ石」とよばれる断崖の裾で、真二つに割れているのがわかったのは翌朝である。燈台の監視員金貝時雄が発見し、同時に尻屋の村から、嵐の去った海岸を一巡して廻った道端徹吉という男もこの難破船を発見している。
船は木っ端微塵といってもいいほど、くだけていた。岩と岩のあいだに、大きな船腹の部分がはさまっていて、家財道具が、そこここの岩にひっかかっていた。道端徹吉はびっくりした。道端が嵐の翌朝、早くに崖を歩いていたのはほかでもない、早朝の「浜歩き」の習慣があった。背中に「負い籠(金であんだ丸型の小籠)」を背負って老若男女を問わず、歩きまわる

風習である。夜のうちに、岩にひっかかった獲物や、薪材を、拾うのである。山に樹一本生えていないのだから、薪材に飢える人びとが、流木を探し求めたとしても、不思議ではない。

十一月三日の朝は、台風が一過したとはいえ、まだ、肌寒い北風が吹いていた。その中を氷雨がしょぼしょぼふりそそぎ、海の色も黒褐色だった。道端徹吉は、まだ、夜の色がのこっている海岸を燈台の方に向って歩いていて、難破船らしい残骸を見て息をのんだ。燈台の塔上でも金貝時雄が、双眼鏡でそれを見て息を呑んでいる。

〈難破船だべ〉

よくみると、船の木片のほかに人影のようなものがういている。

さらにまた、ふとんらしいものが岩にひっかかっている。

「やっぱり難破船だ……」

道端徹吉は村の方へ走りだした。尻屋の部落に駐在所はなかった。警察は田名部である。尻屋から七里もはなれた大湊線の駅のある町である。燈台から派出所へ電話連絡がなされ、派出所から三名の警官と、町の消防団員五名が大急ぎで自転車できたのは、正午すぎ、現場は大騒ぎだった。尻屋と岩屋の部落から、およそ四、五十名の老若男女が集まっていた。尻屋区長の野本政吉は、道端の床屋の息子の注進で、大急ぎで現場へきてみた。それから、村じゅうへふれを廻した。村人たちは蒼白になった。ほかでもない。難破船だとはわかっても、人間がどこにも見えなかったからである。乗組員全員が、波にさらわれたとみられる。海はまだ荒れている。激しいみぞれ雪が降る。見通しがきかない。おそらく、遭難は真夜中だろう。村でも金属

製の箱をこわすような轟音をきいたものがいるし、おそらく、船は、十六、七人乗りの伝馬船にちがいなく、南から、北に向っていたのだろう。あるいは、北海道へ向っていたか、海峡を西へ折れようとして岩礁の多い難所に首をつっこんだか。嵐の海は真二つに割れた船をさらに沖の方へ呑み、人も道具も、一切を鵜呑みにして、無気味にだまっていた。

部落の人たちは、昔なら、「長柄のカマ」を使う時がきたと、雀躍して、家へカマを取りにひっかえしたかもしれないが、この物語りのはじまる大正三年は、すでに、日本の津々浦々に警察があり、法治国家であったから、そのような物盗り強盗はゆるされない。燈台からいち早く田名部の警察と消防団に連絡がなされた。警官と消防団員がかけつけた時、みぞれ雪はやまず降りしきる一方だった。これでは、手だてはない。現場は五十メートルも落ちこんだ崖下である。上の方からのぞいて、眺めているしかないのだった。舟をだしてみようという案が出たが、少し波がおさまらなくてはどうにもならない。結局、夕刻に雪が小降りになるまで延ばされた。

尻屋の村しもにある朽ちかけた桟橋から、三艘の丸木舟に乗って警官や消防団員や村人が漕ぎ出たのは夕刻だ。台風一過とはよくいったもので、西空の雲が少し割れ、うす明るい残照が海上を照らしはじめていた。人びとが、息をのんで眺める中を、三艘の舟は現場に急行した。なるほど、大きな木片が岩を噛んでつきささったように動かない。ある岩は重油をかぶってギラギラと光っている。附近に白い粕のようなものが浮遊している。小麦粉でもはこぶ船だったのか。ドンゴロスの袋や、俵のようなものが浮いている。船はさらに三方に分れて沖の方へ

捜索に出かけた。と、死体が一つ見つかった。男であった。二十七、八の詰襟服の男で、さらにその男のわきに、三十五、六の女がういていた。髪の赤い女だった。紅いメリヤスを着、傘をひろげたように髪が円をえがいて散っていた。村人のひとりが竹竿で髪をうごかした。みると、白い都会風の横顔で、船員の妻だろうか。それとも、貨物船に便乗して、北海道にわたろうとした夫婦でもあろうか。哀れな一対の死体は村人の涙をさそった。死体はぞくぞく見つかった。十三体あった。身装(みなり)や、風体から推察して、小麦粉か機材をつんだ伝馬船に便乗した客だろう。死体は、「長柄のカマ」でひきよせられた。いちいち舟に積み、尻屋の浜まではこばれた。やがて区長の持ち物であるひしゃげた三角型の舟小舎の地べたに莚(むしろ)を敷いてならべ、夕方おそくまでかかって、二名の死体が追加されたが全員遭難で生きのこったものは一人もなかった。だから、遭難時の模様を訊きただす資料はどこにもない。

西空を染めていた茜(あかね)色の雲が、ようやく夜の色にかわろうとしていた。四時すぎだった、野本政吉と床屋の道端徹吉、それに三人の村人をのせた舟が、まだ海上にいた。村人たちは、最後まで、死体さがしに躍起になっていた。船首を尻屋の方向にむけ、道端徹吉が櫓(ろ)を力づよくうごかして、肩を振った。と、この時、「おや」と口の中でつぶやいた。

「んなし……おがしな声がしたべ」

と彼はいった。区長たちは耳をすました。遠い方から、赤ん坊の泣き声がした。オギャア、オギャア、オギャア、ときこえた。

「おがしいな、赤子ア泣いてるべ」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com